

ベトナム人民海軍司令官主催夕食会 スピーチ

「シン チャオ カック バン！」〈意味：みなさん、こんにちは！〉

「カム オン ス ドン ティエップ ノン ハウ クア カック バン」

〈意味：皆様の温かい歓迎に感謝します〉

ベトナム人民海軍司令官ギエム中將、またベトナム人民海軍の皆様。

本日は、このような格式高く、また温かい夕食会にお招きいただき、海上自衛隊を代表して心より感謝申し上げます。

海上幕僚長による公式訪問は、2019年以来となる約6年ぶりとなります。世界的なパンデミックや激動する国際情勢により、しばらくの間、対面でのトップ同士の交流が叶いませんでしたが、今日、こうして6年という空白の時間を超えて、ギエム中將と固い握手を交わせたことに、万感の思いを抱いております。

空港からこの会場へ向かう道中、私はハノイの街並みを車窓から拝見しました。そこで目にしたのは、溢れんばかりのエネルギーと、驚異的な発展を遂げるベトナムの姿でした。特に、道路を埋め尽くすバイクの奔流（ほんりゅう）。まるで大河の流れのように力強く、そして一人ひとりが目的地に向かって突き進むあの光景は、まさに「昇り龍（タンロン）」の如く上昇を続ける、現在のベトナムという国そのものを象徴しているように感じました。

正直に申し上げまして、あの複雑かつ濃密な交通の流れの中を、接触することなくスムーズに進むドライバーの皆様の技術には驚かされました。我々海上自衛官・海軍軍人は、海の上で艦艇を操り、精密な艦隊運動を行います。ハノイの交差点で見られる「阿吽の呼吸」に比べれば、我々の操艦技術などまだまだ及ばないのではないと容易に理解することができました。

このベトナム国民の底知れぬバイタリティーと、社会全体の力強さに、まずは最大限の敬意を表します。

今回、私がこうしてハイフォンの地を踏むことができたのは、我々にとって極めて大きな意味を持ちます。ベトナム史上最も重要な海戦であった13世紀における白藤江（はくとうこう）の戦いは、まさにこの地が舞台となり、ベトナム軍の総司令官として元（げん）の水軍を迎え撃ったのは、昨日まで呉港に寄港していた越海軍艦艇の名前と同じ「チャン・フン・ダオ」でした。

また、本日の私の心は、ある特別な感動に包まれています。それは、本日、貴国の偉大なる父、ホー・チ・ミン主席の廟（びょう）へ献花し、その足跡に触れる機会を頂いたからです。

廟の荘厳な空気もさることながら、私が最も心を揺さぶられたのは、主席が生前過ごされた「高床式の家」でした。一国の最高指導者でありながら、宮殿に住むことを拒み、木造の簡素な家で、池の鯉に餌をやり、質素儉約を貫かれた。その姿は、私利私欲を捨て、ただひたすらに国民と国家のために尽くすという、リーダーシップの極致であります。

「独立と自由ほど尊いものはない」

ホー・チ・ミン主席が遺されたこの言葉は、単なる歴史的なスローガンではなく、貴国の皆様の魂に刻まれた「誇り」そのものであると理解しております。我々自衛官・軍人は、国家の独立と平和を守る「矛（ほこ）」であり「盾（たて）」です。

しかし、その根底になくてはならないのは、主席が示されたような、国を愛し、民を慈しむ高潔な精神です。国は違えど、国民の命と平和を守るという崇高な使命を帯びた指揮官の一人として、ホー・チ・ミン主席の精神に深く共感し、襟を正す思いがいたしました。

歴史の重みを知る皆様だからこそ、平和の尊さを誰よりも理解されているはずです。我々、海上自衛隊もまた、海という共有の財産を通じて、「自由で開かれた海」を守り抜く覚悟です。

一昨年、日越外交関係樹立 50 周年を経て、両国の関係は「包括的戦略的パートナーシップ」へと昇格しました。しかし、どんなに素晴らしい合意文書よりも、今日こうして皆様と膝を突き合わせ、目を見て語り合うことこそが、最も強固な信頼の証であると確信しています。

6 年ぶりの訪問は、単なる「再会」ではありません。これは、日本とベトナムの海軍種同士が、未来に向けて共にスクラムを組み、新たな航海へと漕ぎ出すための「出港」の合図です。ホー・チ・ミン主席が愛したこの美しい国と、日本の間に広がる海が、これからも平和と繁栄の懸け橋であり続けるよう、共に汗を流していこうではありませんか。

改めて本日は、このような温かいおもてなしを頂き、御礼申し上げます。

「シン カム オン」〈意味：ありがとうございます〉

「チュック ムン、チュック スックェ」〈意味：おめでとう！健康祝して！〉